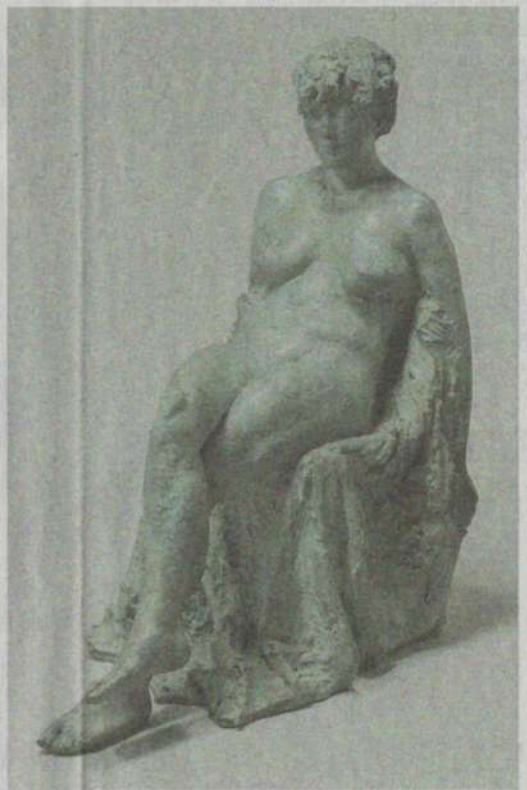
金曜アート

私の美学 自選の一点

瀬

人間の形を超える何かを

勝野 真言さん



2019年 強化プラスチックに彩色 高さ約135㌢ 改組新第6回日展文部科学大臣賞受賞作 画像提供＝公益社団法人日展

かつの・まこと 崇城大芸術学部教授。1954年、木曽郡南木曽町生まれ。武蔵野美術大大学院修士課程修了。日本彫刻会展で83年と84年に奨励賞、87年に日彫賞、2005年に西望賞。日展で87年と91年に特選、05年に会員賞。白日会展で94年に白日賞、98年に長島美術館賞。97年、昭和会展優秀賞。00年、日本現代陶彫展銀賞。

木曽郡南木曽町出身で熊本市在住の彫刻家・勝野真言さんが今秋、日展（日本美術展）に出品した「瀬」で文部科学大臣賞を贈られた。勤め先の崇城大芸術学部（熊本市）へインタビューに訪ねたら「うれしいし光栄だけれど、前回の日展で受賞できたらよかったな」。そこで前回の出品作「音・2018」もここに掲載した。

「音・2018」は近年の作風を代表するもので「自選の一点」とするにふさわしい自信作。「瀬」は「見たものに素直に反応しようと思って作った。到達点というより、この先に工夫すべき何かがあるという出発点に戻ってみた作品なんです」。

既に受賞の多いベテラン。蘇南高校（南木曽町）を卒業後、東京の大学で彫刻を専攻した。ほとんど手を加えない木や石などを布置して作品とする「もの派」という新しい表現が隆盛した時代。人体彫刻を主に学んでいた勝野さんも「やがては人体や具象を離れて新しい表現へ」と思い描いていたという。

だが「ある課題制作で行き詰まった時に自戒した。人体彫刻での困難を解決できなければ、新しい表現に突き進んでも解決力は身に付かないままだぞ―と」。以後、一貫して人体を造形している。「行き詰まりと解決を繰り返しながら、ですが…」

「幼い頃はアンリ・ファーブル（19～20世紀の昆虫学者）のような人物に憧れていました。研究や執筆などの一人で続ける活動に興味があり、その一つが美術だったんです」。父の知り合いで諏訪郡原村出身の彫刻家だった故・清水多嘉示を訪ね、進路を相談したという。

「彫刻を学び始めて感動したことがある。それは、人体は南木曽の風景に似ているということです。近景にキノコを探る山、中景に国有林、遠景に木曽駒ケ岳が見えるというように、ヒトの裸身も例えば脚から腰、胸、肩、頭へと眺めると山々や木々の遠近を思い起こします」

「モデルの通りに作りながらも、その形を超える何か違うもの、例えば山のような大きさや奥深さを表すことができたらな―。そう願って仕上げたのが『瀬』です」。外面の造形を通じて内面の表現に至る、近代彫刻の基本に戻っての制作だった。

一方、少女像にも少年像にも見える「音・2018」はモデルの通りではあるまい。肘の辺りを衣の上から帯状の金具でいましめられ、かすかにうなだれて耳を澄ます姿。これは人間に内在する記憶や概念の表現ではなく、外在する環境や社会の象徴ではないかと感じられる。

「実は、うなだれた首の傾きは偶然の産物」と笑う。磁器の土で作られており、焼いた時に首が絶妙に傾いたそうだ。「熊本の天草で産する土です。焼く前から白い。細部の陰影も出やすいので造形のごまかしが利かない。そこが面白くて近年、工夫を重ねている作風なんです」

「人体彫刻は新しい表現ではありません。でも、今ほど人間とは何かが問われている時代はない。人間を表現することは最も現代的な芸術上の主題だと思います」

「瀬」が入賞した改組新第6回日展は京都市などを巡回後、来年4～5月に安曇野市豊科近代美術館で開催。（植草 学）

「音・2018」2018年 セラミック、金属など 高さ約120㌢ 改組新第5回日展出品作 画像提供＝公益社団法人日展

信濃毎日新聞　2019年12月13日掲載　許2030101